県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

富山県井口村

蛇喰正覚寺遺跡

1999年3月

井口村教育委員会

序

井口村は、富山県西部の砺波平野の扇のかなめ部分にあたる水田地帯に位置します。村内では、これまで井口遺跡（縄文後期の標識遺跡）、井口城跡（中世）、蛇喰正覚寺遺跡（中世集落跡）などの著名な遺跡が知られております。また、最近の開発事業などに伴い村内全域で分布調査を行っており、新たな遺跡と推定される箇所が多数みつかりつつあるところです。

今般、県営担い手育成基盤整備事業(蛇喰地区)の実施に伴い、平成９年度においては、蛇喰Ａ遺跡の発掘調査を行い、本年は、井口城跡と蛇喰Ａ遺跡を結ぶ延長線上に位置する蛇喰正覚寺遺跡の発掘調査を実施いたしました。同事業においては、盛土工法によって遺跡の保存・保護を基本としておりますが、平成10年度においては、農道敷地並びに用排水路の発掘調査を実施いたすこととなりました。

調査の結果、中・近世の掘立柱建物跡、溝、井戸などや縄文時代や中・近世の土器類、石製品、金属製品、木製品が多数出土し大きな成果となりました。本書は、その調査結果をまとめたものであり、出土品と併せて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いであります。

この調査の実施にあたり、多大な協力を賜りました富山県埋蔵文化財センター・富山県農林水産部・同砺波農地林務事務所・井口村シルバー人材センター・県営担い手育成基盤整備事業蛇喰地区委員会を始め、地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成11年３月

井口村教育委員会
教育長　吉　田　喜　三

例　言

1　本書は、県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業に伴う富山県東砺波郡井口村蛇喰に所在する蛇喰正覚寺遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、富山県農林水産部の委託を受けて、井口村教育委員会が主体となり実施した。竝元負担金については国庫補助金・県補助金を受けた。また、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。調査期間・調査面積及び調査員は以下のとおりである。
　調査期間　平成10年６月24日～同年11月11日　　調査面積　3,200㎡
　調 査 員　富山県埋蔵文化財センター調査課　主　任　安念幹倫・文化財保護主事　境　洋子
3　本発掘調査に関する記録資料及び出土遺物は、一括して富山県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
4　本発掘調査及び本書に用いた遺跡の略号は「IKJS」で、その後にⅠ・Ⅱ地区それぞれの地区名を付した。例えば、Ⅰ地区の場合「IKJS－Ⅰ」となる。
5　遺構に関しては、遺構の種別にかかわらず通し番号を付して、番号の前に種別を表す記号を冠した。使用した記号が表す遺構は、以下のとおりである。
　SB：掘立柱建物　　SD：溝状遺構　　SE：井戸　　SK：土坑　　P：柱穴
6　土層の色名については、小山正忠・竹原秀雄　編・著『新版標準土色帖』に基づき、現地で色相・明度・彩度を記録した。
7　遺構実測図中にある方位は真北を示し、断面図中の基準線の数字は海抜の高さを表す。
8　本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力により安念幹倫・境　洋子があたり、それぞれの文責は各文末に記した。

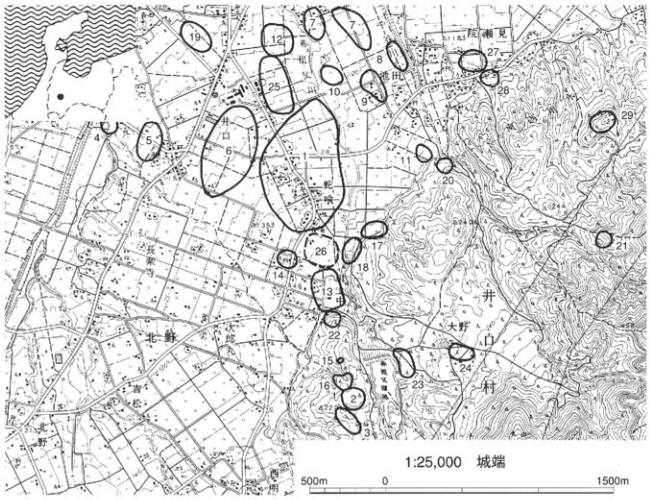
目　次

序
例　言
Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査の概要……2
　1　調査に至る経緯……2
　2　調査地区の位置と区割……2
Ⅲ　Ⅰ地区の調査……4
　1　概　要……4
　2　遺　構……4
　3　遺　物……7
　4　小　結……7
Ⅳ　Ⅱ地区の調査……8
　1　概　要……8
　2　遺　構……8
　3　遺　物……17
　4　小　結……20
Ⅴ　考　察……20
参考文献……20
写真図版
報告書抄録

Ⅰ　位置と環境

蛇喰正覚寺遺跡は、富山県東砺波郡井口村蛇喰に所在する遺跡であり、南砺複合扇状地に立地し、標高は120m～135mである。現時点で把握している周辺の遺跡としては第1図に示したとおりであるが縄文時代・古代・中世の遺跡が近接し、縄文時代後期の遺跡として有名な井口遺跡は、本遺跡の西方1300mに所在する。古代の遺跡としては、本調査の実績はないものの、分布調査・試掘調査から遺跡の存在を確認している。中世の遺跡としては、井口城跡に代表されるほか多くの遺跡が所在する。今回発掘調査を実施した蛇喰正覚寺遺跡は、中世を主体とする遺跡である。中世の井口村は、本遺跡の北方に所在する井口城を中心に発展していた。

井口城跡は、宝暦14（1764）年の書上申帳にその記録がある。昭和37年のほ場整備により開発の手が入ったが、ほ場整備前までは堀の南側部分が溜め池として残っていたほどである。また、城跡の南側には「ジョウシミチ」という字名が残り、地元の住民の話によるとその部分の耕作地だけ高くなっていたということから、「ジョウシミチ」は「城主道」のことかと思われる。城跡そのものについては平成元年に発掘調査を実施しており、遺構としては堀・建



遺跡名
1蛇喰正覚寺遺跡　2西小丸山遺跡　3北野上林遺跡　4井口遺跡　5井口南遺跡　6井口A遺跡　7久保・池田No.3遺跡　8久保・池田No.4遺跡　9久保・池田No.5遺跡　10久保・池田No.6遺跡　11久保・池田No.7遺跡　12井口城跡　13川上中遺跡　14川上中土居の宮遺跡　15川上中広道鳴遺跡　16蛇喰諏訪遺跡　17蛇喰タケダン遺跡　18蛇喰善休寺谷遺跡　19宮後キンケン塚　20池田堂屋敷遺跡　21久保石塚　22寺山中世墳墓群　23持掛谷遺跡　24大野遺跡　22蛇喰A遺跡　26蛇喰C遺跡　27院瀬見滝谷遺跡　28院瀬見薬師遺跡　29井波丸山城跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

物・井戸等を検出し、遺物の種類・量ともに数多くの出土があった。井口城は、『三州志』によると元弘年間（1331～1334）に井口氏の居城であったとされ、『太平記』には康安２年（1362年）の戦いの記載に桃井直常の軍事拠点として「井口の城」とあるなど、鎌倉時代末～南北朝時代にかけての存在が知られるほか、『井口村史料』から、その後の文明年間（1469～1487年）には今村氏の居城であったことが知られている。現在では、発掘調査の成果からその重要性を認められ、平成４年１月に村指定文化財として指定を受け、水田下に保存されている。

今回の発掘調査は、このような歴史的環境を有する地域の周辺におけるものであり、本遺跡は前述した井口城の南側に近接する遺跡である。また、本遺跡範囲内には蛇喰館・正覚寺館（いずれも村史編纂時に便宜上付した名称）という中世の館跡の存在が指摘されている。

Ⅱ　調査の概要

１　調査に至る経緯

平成７年12月に本遺跡の所在する井口村蛇喰地内における「県営担い手育成基盤整備事業（区画整理型）」の動きがあった。それを受けて村では平成８年５月に『県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業計画』を策定した。この事業は、蛇喰地区54haを対象とし、平成８（1996）～12（2000）年度の５ヵ年間で実施する計画のものであった。井口村教育委員会では、平成７年12月の時点で計画地内に遺跡が広がることを予想できたため、富山県埋蔵文化財センターから嘱託員の派遣を受けて、蛇喰地区内全域の分布調査を実施した。その結果、同地区内の広範囲において遺物の散布と蛇喰Ａ～Ｃ遺跡の存在を確認したため、平成８年度から国庫補助金を受けて試掘調査を開始した。この調査の結果、遺跡の存在を確認したため、平成８年11月に富山県農林水産部・同砺波農地林務事務所・富山県埋蔵文化財センター・井口村産業建設課・井口村教育委員会・地元土地改良区が協議を重ねた結果、遺跡の大半は盛土により水田下に保存し、破壊を免れない一部の面工事・道路・用排水路部分について本調査を実施することとなった。平成９年度以降、同地内においては試掘調査を継続して実施しており、遺跡の範囲確認と今後必要な本調査について検討している。また、平成８年度の試掘調査の結果を受けて、平成９年度には蛇喰Ａ遺跡の工事にかかる部分について本調査を実施した。

２　調査地区の位置と区割り

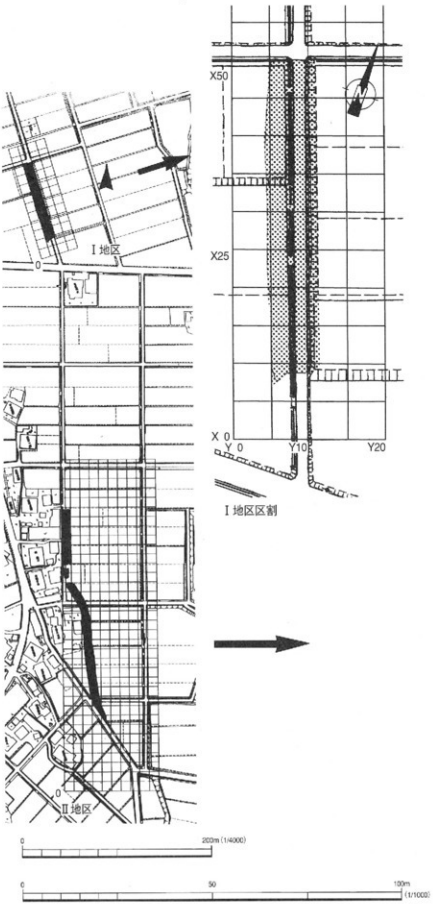
今回、本調査を実施した地区は、第２図に示すとおりで、Ⅰ地区は蛇喰館跡に隣接し、Ⅱ地区は正覚寺館跡に隣接している。調査地区が大きく２箇所に離れたため、北側の調査地区をⅠ地区、南側の調査地区をⅡ地区として区分した。また、Ⅱ地区に関しては南北230mの長さにおよぶため、便宜上１～４区に区分した。１区はＸ110～150Ｙ１～６に個人住宅前を含む範囲、２区はＸ90～109Ｙ３～14の範囲、３区はＸ50～89Ｙ15～19の範囲、４区はＸ37～49Ｙ15～23の範囲に位置する。

３　調査の方法

発掘調査は、事前に旧耕作土である表土を重機で除去し、その後に基準杭を設置した。調査地区を覆うグリッドは南北に細長い調査区であるため、国家座標を用いないでⅠ地区・Ⅱ地区それぞれについて任意に設定した。Ｘ軸を東西方向Ｙ軸を南北方向にとり２m四方を一区画とした。

表土を除去した後にベルトコンベアーを導入して人力で各工程の掘削を順次おこなった。包含層から出土する遺物の取り上げにあたっては、２m四方の各区画番号を付した。

Ⅱ地区１～４区の各区の調査順序は、着手可能なところから先に発掘調査を実施した。最初に３区に着手し、その後１区→２・４区の順に調査を進めた。（境）



第２図　発掘調査地区の位置と区割

Ⅱ地区区割

Ⅲ　Ⅰ地区の調査

1　概　要

調査区は、昭和30年代に実施されたほ場整備事業（団体営区画整備事業）によって区画された、水田及び農道部分にある。そのため第１層は、ほ場整備によって構築された褐灰色粘質土の耕土及び耕盤。第２層は、ほ場整備事業以前の耕作土（ほ場整備により削平され確認できない場所もある）。第３層は、黒褐色粘質土。この層が中世の遺物包含層である。第４層は、黄褐色粘質土の地山層である。なお、遺構検出面は第４層上面である。

2　遺　構（第３・４図　写真図版１）

確認した遺構は、掘立柱建物（SB）、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）である。

壇　調査区のほぼ中央部に、地山面が周辺より一段（30～60cm程）高い部分がある。しかし壇が調査区外へ広がるため、その全容は把握できない。調査区内で確認した大きさは、南北約17m・東西約７mで直角三角形のような形を呈する。この部分では、遺物包含層である黒褐色粘質土層がどこよりも厚く堆積していたほか、遺構もどこより顕著であり、また遺物も多く出土した。

この一帯は山間地の基部であるため、傾斜が強く、谷が入り込んだ複雑な地形であった。しかし昭和30年代に実施されたほ場整備事業によって、北に位置する水田が標高にして50cm前後低くなる構造で区画した水田地帯となった。にもかかわらず、調査区に掛かった水田及び東西に接する水田と、それらに北接する水田との標高差は１～２m程である。村史によれば、調査区周辺を「タツ」「タチアト」その北側を「シタタチ」と俗称で呼んでいたことがわかる。館が存在したかは別として、ほ場整備以前、この周辺が他に比べて一段高い地形であったことが窺える。したがって、その名残が、現況に影響していると考えられる。

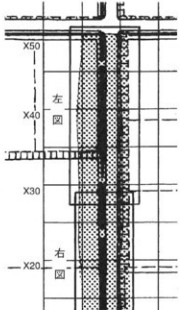
SB01　X23～26Y６～８にある、２間（5.56m）×１間（3.27m）の南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行が13尺と６尺、梁行が11尺である。柱穴の配置状況から１間（3.8m）×１間（3.27m）の南北棟に南廂が伴う建物とも考えられるが、検討の結果２間×１間の建物とした。また桁行の方向はN－0°である。柱穴の掘形は、径35～45cmの円形を呈するが、深さはそれぞれ異なる。埋土は礫を含む黒褐色粘質土であるが、中には黄褐色系の粘質土が混入するものもある。

西側桁行列の柱穴は壇上部に、東側桁行列の柱穴は壇上部下にそれぞれ構築されたため、柱穴の深さを測ると10～70cmとかなりのばらつきがある。このことから、これらの柱穴を同一の掘立柱建物の柱穴として扱えるか、と疑問視される。しかし柱穴底部の絶対高を測ると、対応する各柱穴底部の高さはほぼ同じであることがわかる。したがって同一の掘立柱建物の柱穴として扱った。

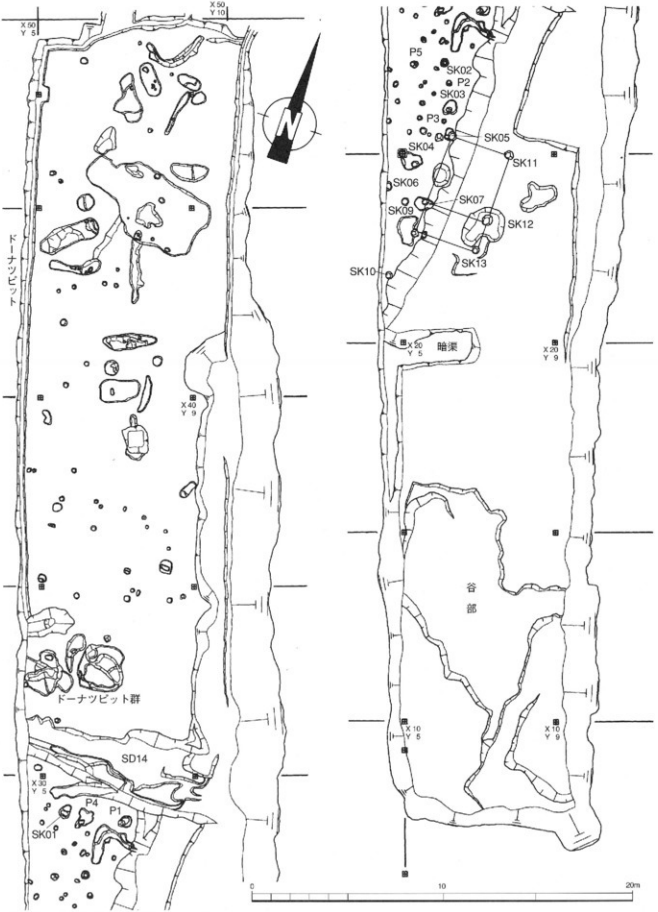
SE01　X25Y６にある、素掘りの井戸である。掘形は長軸120cm・短軸90cmの楕円形を呈し深さ約160cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であるが、底部に近づくにつれて人頭大程の礫を含むしまりのない黒褐色粘質土となる。これらの礫の出土状況から、埋めた際に投げ込まれたと考えられる。井戸の構築状況を把握するため、断割りを実施した。断面観察から、地山は３層に分層できる。地山第１層は遺構検出面でもある黄褐色粘質土層で20cm程、地山第２層は明黄褐色砂礫層で120cm程がそれぞれ堆積する。第３層は粗砂層であり、湧水層でもある。なお、井戸の掘込みはこの粗砂層まで達している。

SD14　壇の北縁にある東西溝。壇を分ける区画溝として、構築された可能性もある。

（安念）



Ⅰ地区図割



第３図　Ⅰ地区遺構配置図（1/2,000）

第４図　Ⅰ地区遺構配置（1/80）

3 遺　物（第5図　写真図版7）

遺物は、ほとんどが中世のものである。1～5・60・61は土師器皿で、1がSK07から出土したものでロクロ成形をしており口径11.8cm器高2.2cm、2はロクロ成形をしており口径12.6cm器高2cm、3・4はX27Y6の区画の同一地点から出土したもので、いずれもロクロ成形で底部を削って仕上げている。3は口径14.4cm器高2.9cm、4は口径15cm器高2.9cmである。5は、ロクロ成形で口径13cm器高3.5cmである。60は3・4と同様にロクロ成形で底部を削って仕上げるもの。61はロクロ成形の土師器皿である。6～9・62は珠洲、6～8は擂鉢で6は口径30cmで口縁部に波状文をめぐらす。9は壺の口縁部で口径21cm、62はSE01からの出土で甕の胴部破片である。10は瀬戸の灰釉碗か。63は京焼風肥前陶器の碗、64は肥前磁器の碗である。

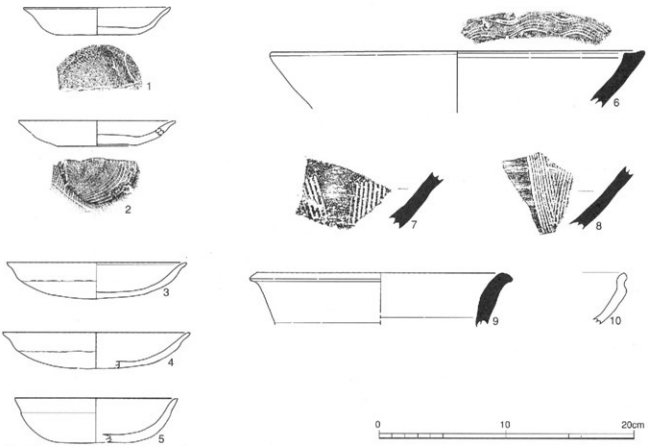
遺物の時期は1～4・60・61が15世紀後半～16世紀初頭、5が15世紀代、珠洲はⅢ期～Ⅴ期のもので、6がⅤ期に属し、14世紀末～15世紀前半。

この他に、染付・唐津・越中瀬戸・鉄製品・古銭（寛永通寶）がある。

4 小　結

Ⅰ地区は、『井口村史』で指摘された鉦喰館の東側に隣接する地区である。Ⅰ地区の東川から谷地形になるため本地区が遺構が広がる範囲の端にあたると考える。そのため、今回の発掘調査では、館跡の存在を確認するには至らなかったが、掘立柱建物や井戸を検出したことから、中世に人がこの地点に居住していたということは間違いがないと言える。

なお、遺構の時期に関しては、遺物量は少ないものの、「堆」とした部分から出土した遺物が15世紀代～16世紀初頭のものが主体であることから、同様の時期に属するものと考える。（境）



第5図　Ⅰ地区遺物実測図（1/3）

Ⅳ　Ⅱ地区の調査

1　概　要

調査区は、一般県道井波・井口・城端線に沿って建ち並ぶ家の東側にある、農道とその周辺の水田の一部である。またこの地区は、平成９年度に実施した試掘調査で、試掘坑Ｔ193～Ｔ272を設定した箇所にあたる。

調査区の含まれた農道の下には、砺波広域圏企業団の送水管と井口村の簡易水道の配水管の２管が、埋設されている。管は遺構検出面よりも低い位置で埋設されたため、その部分の遺構は破壊されていた。

基本層序は、第１層はほ場整備によって構築された褐灰色粘質土の耕作土と耕盤、　第２層は褐灰色粘質土ではほ場整備事業以前の耕作土（ほ場整備により削平され確認できない場所もある）、第３層は灰黄褐色粘質土と黒褐色粘質土がある、この層が中世の遺物包含層である。第４層は、黄褐色粘質土の地山層である。なお、遺構検出面は第４層上面である。

2　遺　構（第６図）

確認した遺構は、掘立柱建物（SB）、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）である。

(1)　１区の遺構（第７・８図　写真図版２～４）

SB01　Ｘ130～132Ｙ3.5～５にあり、１間（3.24m）×１間（2.48m）の南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行が11尺、梁行が８尺である。また桁行の方向はＮ－０°、平面積は8.4㎡である。柱穴とした掘形には、径約50～70cmの円形もの、長軸100cm・短軸80cmの楕円形のものがあり、深さは約20cmと浅いもの、45cm前後を測るものがある。埋土は黒褐色粘質土である。埋土は黒褐色系の粘質土であるが、黒褐色に褐色のブロックが２割程入った粘質土ものもある。掘形はいずれも大型である。

SB02　Ｘ124～127Ｙ2.5～５にあり、１間（4.86m）×１間（4.62m）の南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行16尺、梁行15尺である。また桁行の方向はＮ－０°、平面積は22.5㎡である。柱穴とした掘形には、円形のもの（径約80・90cm）、楕円形（長軸90cm・短軸60cm、長軸110cm・短軸90cm）を呈するのものがあり、深さは約70～80cmを測る。埋土には黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土がある。SK74・66の掘形中央部には、径20・25cm程の埋土が黒褐色粘質土である柱根跡を確認した。掘形はいずれも大型である。土坑の位置・寸法から、SK65が西側桁行の中柱になる可能性もあるが、東側桁行列に対応する土坑（柱穴）を検出できなかったので、柱穴として取り扱わなかった。

SB03　Ｘ123～125Ｙ３～4.5にあり、１間（4.0m）×１間（3.02m）の南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行13尺、梁行10尺である。また桁行の方向はＮ－０°、平面積は12.1㎡である。柱穴とした掘形には、円形のもの（径約60・80cm）、楕円形（長軸90cm・短軸50cm、長軸120cm・短軸80cm）を呈するのものがあり、深さは約50～70cm、SK73は約105cmを測る。埋土は黒褐色粘質土、褐灰色粘質土ににぶい黄褐色粘質土が混入する土、にぶい黄褐色粘質土に褐灰色粘質土が混入した土である。SK69・76の掘形中央部で、径20cm程の柱土が黒褐色粘質土である柱根跡を確認した。SK69からは越前が出土した。

SB04　Ｘ123～124Ｙ３～５にあり、１間（4.12m）×１間（2.8m）の東西棟の建物である。柱間寸法は、桁行14尺、梁行９尺である。また梁行の方向はＮ－７°－Ｗ、平面積は11.5㎡である。柱穴とした掘形は、SK90は径約60cmの円形であるが、その他は楕円形（長軸50・70・110cm・短軸30・50・60cm）を呈する。深さは50～55cm、約110cmを測る。SK90では検出面から25cm程掘り下げたあたりで、腐食は激しいが径約20cm・長さ30cm程の柱が出土した。埋土は、掘形は褐灰色粘質土、灰黄褐色粘質土に分層できる。SK88では検出面ですでに柱を確認した、その大きさは径約20cm・長さ約45cmである。埋土は褐灰色粘質土である。他の埋土は、黒褐色粘質土である。

1区で確認した4棟の掘立柱建物は、すべて1間の建物である。

SB01～03の掘立柱建物は、南北棟で桁行方向はN－0°であるという共通点がある。しかし、SB02とSB03は、遺構が切り合うため同時期に存在はしないと言う事実だけがわかるだけで、各掘立柱建物の関係はわからない。また、SB04は東西棟で梁行方向が7°西に傾き、他の掘立柱建物に比べて異なった様相を呈する。

SK60　X128～129Y1～3にあり、確認した大きさは、一辺約2.5mの方形に一箇所80cm程の張り出すものである。遺構の断面形は船底を呈し、深さは60cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であるが、人頭大もしくはその倍程の大きさの礫が多量に含まれている。礫のあり方から、埋めた際に投げ込まれた可能性がある。しかし、水道管の敷設等により西側部分が攪乱・削平されたため、遺構の全容は確認できない。

SK87　X129～133Y1～3にあり、確認した大きさは全長約7m・幅約3mである。遺構の深さは約20cm前後と浅く、また底部は凹凸が激しい。埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、黒褐色粘質土が10%程混入する暗褐色粘質土、暗褐色粘質土が10%程混入する黒褐色粘質土等である。遺構の南側はSK60に切られる。

SK83　X131Y4にあり、掘形は径約120cmの円形で大きいが、深さ20cmと浅い。埋土は、黒褐色粘質土と一部に焼土と考えられる赤褐色の粘質土があった。遺構はSB01とSK87に挟まれた位置にある。

SK86　X134Y5にあり、掘形は長軸120cm・短軸100cmの楕円形で深さ約70cmを測る。埋土はブロック状のにぶい黄褐色粘質土が混入した暗褐色粘質土である。形状から掘立柱建物の柱穴とも考えられるが、遺構を東壁際で検出したため、その可能性はわからない。

SE70・75　両方とも素掘りの井戸である。70はX125Y5にあり、掘形は直径75cmの円形で深さ約2mを測る。75はX126Y4にあり、掘形は直径65cmの円形で深さ約2mを測る。70の埋土は黒褐色粘質土であるが、井戸内の半ばあたりからは、人頭大程の礫を含むしまりのない黒褐色粘質土となった。75は、ほとんどが礫で埋められていた。断面観察から、地山は4層に分層できる。地山第1層は遺構検出面でもある褐色粘質土に小礫が混合する層で120cm程、地山第2層はオリーブ灰色粘質土に小礫層が混合する層で20cm前後、地山第3層は同粘質土に砂利が混在する層で30cm程、それぞれ堆積する。第4層は同色砂土層であり、湧水層でもある。両井戸の掘込みはこの砂土層まで達している。現在でも水がしみ出ている。なお井戸は重機によって断ち割った。

SD67　X128～133Y4～5にあり、幅30cm前後の全長11mの南北溝。掘形は浅い。土師器皿（15）が出土した。この溝は、SB01の柱穴であるSK79・80に切られている。

川田宅前区（写真図版2）

調査対象区の一部に宅地が含まれている。そのため日常生活に支障がないよう、6.5m×5mの方形のトレンチによる調査で対応した。X114～117Y1.5～4.5に位置する。確認した遺構は、土坑であった。

(2)　2区の遺構（第9図　写真図版4～6）

SD112　X95～97Y8～13にあり、幅2.5m前後の東西溝。調査区を横切るようにあるため、その全容は確認できない。埋土は黒褐色系を基調にした粘質土と、溝底部に堆積した暗灰色粘質土の2層に分層できる。第2層から珠洲の破片の出土を確認した。またこの溝の延長と考えられる遺構を、平成9年度の試掘調査でも確認している（その箇所は調査区の東側の水田内である）。現在残されているほ場整備以前の地形図には、この溝の記載が見あたらないことや、掘形・方向・出土遺物等を検討すると中世の区画溝の可能性がある。遺物量は多く、土師器皿・珠洲である。

SD116　調査区の南半分はこの溝で占められる。溝幅は上端3～4m・下端2m程、深さは場所によって異なるが、南側が最も深く約70cmを測る。埋土は、上層では褐灰色粘質土、中層では黒褐色粘質土を基調とするものであり、下層では灰色粘土が混入した黒褐色粘質土が堆積する。中～下層内からは、人頭大からその二・三倍程の川原石が多量に出土した。溝としてではなく、堰の役割を果たしていた可能性がある。

柱根1・2　柱根1はX108Y7にあり、径約40cm・全長約70cmを測る。柱根2はX107Y7にあり、径約40cm・全長約35cmを測る。いずれの柱も掘形を確認することはできなかった。また柱間は2mを測る。掘立柱建物の柱穴と考えられるが、伴う柱穴を確認することはできなかった。

(3)　3区の遺構（第10図　写真図版6）

SB05　X85～89Y12～15にあり、3間（7.6m）×2間（5.1m）以上の南北棟の総柱建物である。柱間寸法は、桁行25尺で柱間は9尺・8尺、梁行17尺で柱間は9尺・8尺である。また桁行の方向はN－0°、平面積は38.3㎡以上である。柱穴とした12基の土坑の掘形は、大半が径30～40cmの円形を呈し深さ約25～40cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であるが、中には暗褐色系の粘質土が混入するものもある。

SB06　X74～77Y14～15にあり、2間（2.8m）×1間（1.2m）の南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行9尺、梁行4尺である。また桁行の方向はN－10°－E、平面積は3.4㎡である。柱穴の掘形は、径約20～30cmの円形を呈し深さ約25～35cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であるが、中には黄褐色系の粘質土が混入するものもある。

SK06　X88Y13にあり、掘形は長辺2.2m・短辺1.8mの隅丸方形を呈し、深さ約30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺構内からは珠洲の壺（52）が出土した。SK06はSB05内に位置するが、SB05との関係は認められない。SB05の付属施設とも検討したが、SK53はSK06を切った状況で検出している。つまりSK06が埋められた後に、SB05を構築した可能性が高い。

SK07　X83Y14にあり、掘形は長辺2.2m・短辺1.8mの隅丸方形を呈し、深さ約30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。土師器皿（53）・白磁の合子（54）・珠洲の擂鉢（55・56）が出土した。

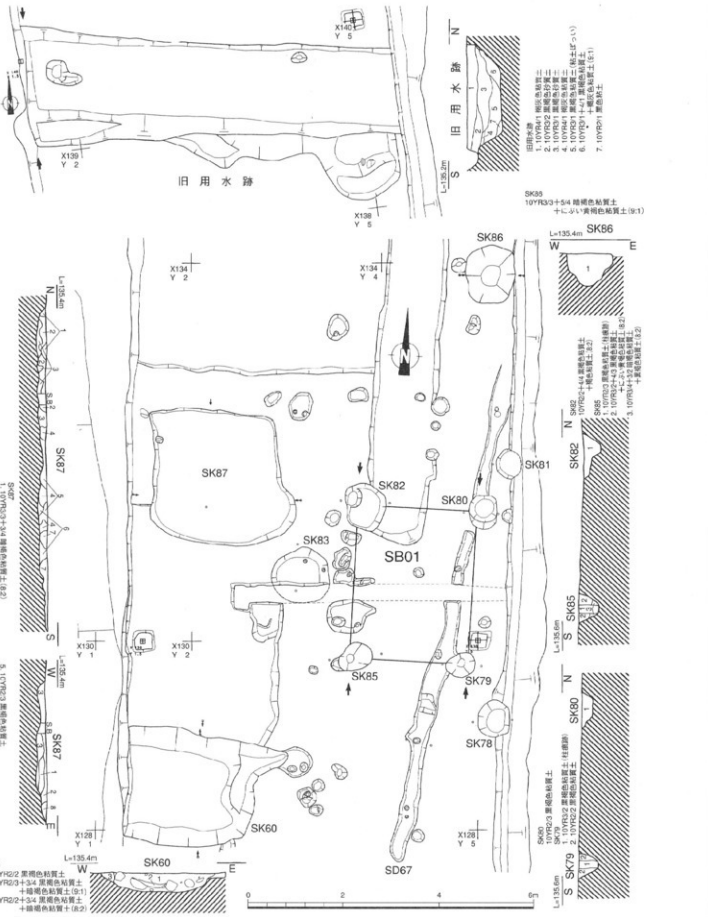
SK11　X71～72Y12～15にあり、埋土や掘形の状況から東西にある土坑は、同一の遺構と考え、西側を1、東側を2とした。SK11－2（東側）は全長4.5m×幅1.3mを測り、底部は段上となっているため深さは12～45cmとばらつきがある。掘形や底部状況から、5基程の小規模な楕円形の土坑が切り合って、このような土坑ができたと考えられる。埋土は褐色系の粘質土である。SK11－1の断面観察から、遺構の掘込みが第3層上面であるのが確認できる。また、第3層は中世の遺物包含層であることから、この遺構は中世以降のものと考えられる。地山は褐色粘質土で、良好な山土である。遺構が第3層上面から掘り込まれていること、構作土に似た黒褐色粘質土が埋土であることから、後世に掘り返された土坑の可能性がある。

SE48・49・50　3基とも素掘りの井戸である。SE48はX82Y12にあり、掘形は長軸120cm・短軸80cmの楕円形で深さ約2.2mを測る。また掘形は垂直掘りではなく、南方向に傾斜している。SE49はX83Y12にあり、掘形は直径90cmの円形で深さ約2.4mを測る。SE50はX86Y13にあり、掘形は直径110cmの円形で深さ約2.3mを測る。また、この井戸はSB05内に位置する。埋土は黒褐色系もしくは褐灰色系の粘質土であるが、底部に近づくにつれて礫を含むしまりのない黒褐色粘質土となる。断面観察から、地山は5層に分層できる。地山第1層は遺構検出面でもある黒褐色粘質土がブロック状で10%程混入した灰黄褐色粘質土層で20～50cm程、地山第2層は褐色粘質土に小礫が混合する層で30cm前後、地山第3層は褐色粘質土層で1m程、地山第4層は灰黄褐色砂質土層で60cm程がそれぞれ堆積する。地山第5層は同砂質土に橙色鉄分を含む層である、湧水層でもある。3基の井戸の掘込みはこの砂上層まで達している。現在でも水がしみ出ている。なお、井戸は重機によって断ち割った。

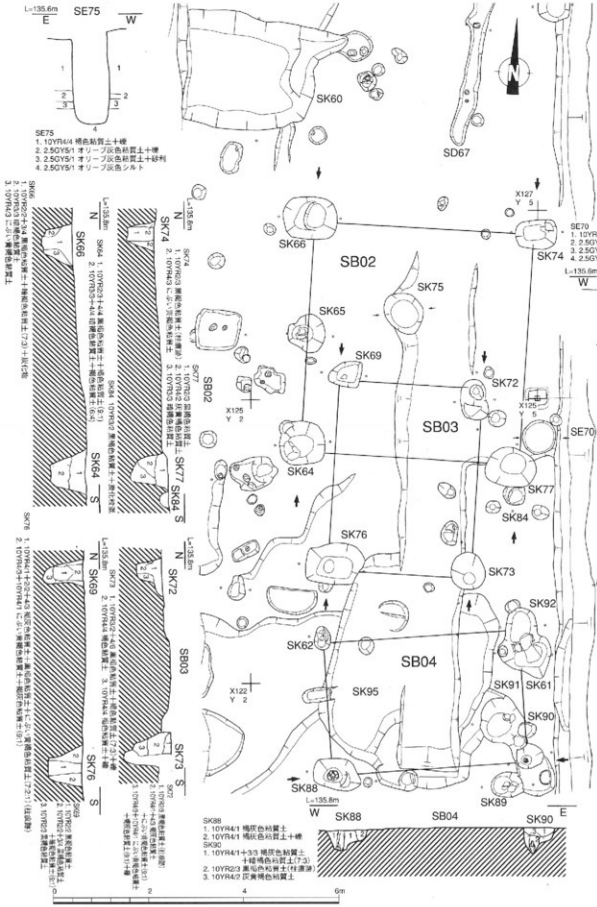
(4)　4区の遺構（写真図版6）

計画される農道と現道が交わる箇所にあるため、調査区は三角形を呈する。検出した遺構は、20数基の土坑、風倒木痕であった。蛇喰地区には神明社・春日社・八幡社の3社があったが、明治21年1月以降、現在の神明社に合祀された。地区民によれば、この調査区あたりに「春日社の祠が存在した」と言うが、社等に係わる遺構と考えられるものは、認められなかった。　（安念）

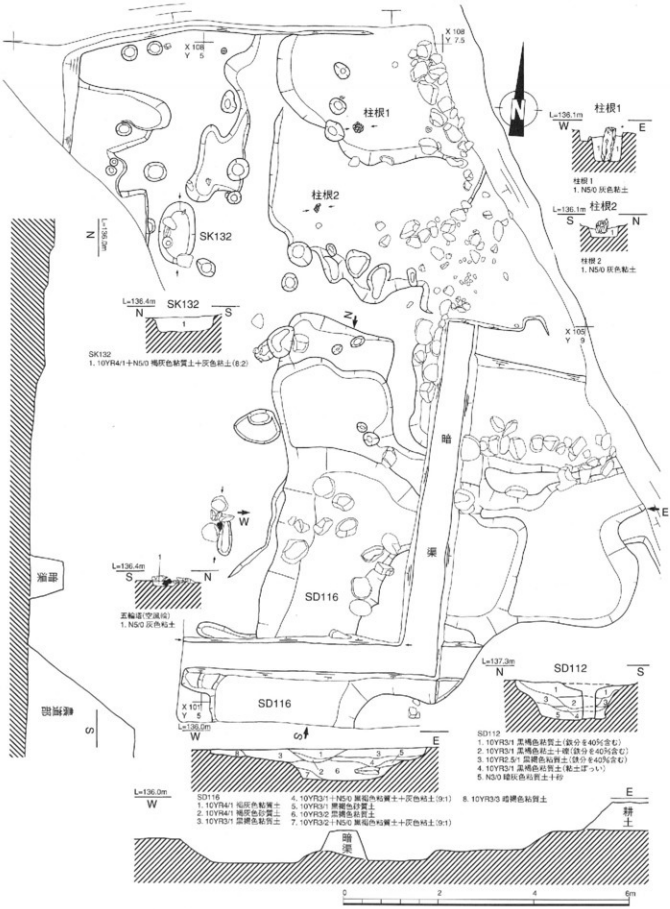
第6図　Ⅱ地区遺構配置（1/200）



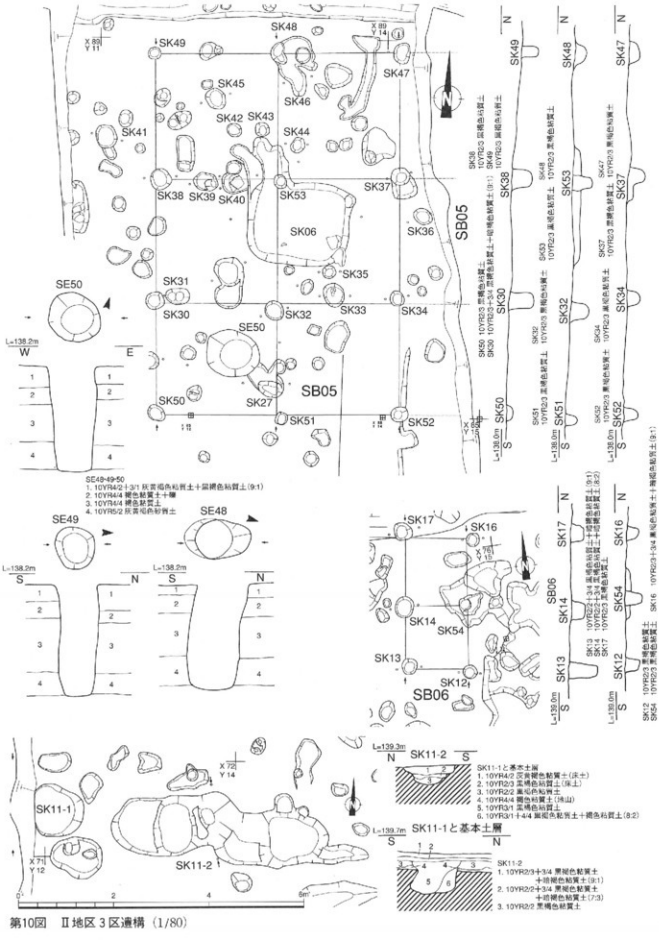
第７図　Ⅱ地区１区遺構１（1/80）



第８図　Ⅱ地区１区遺構２（1/80）



第９図　Ⅱ地区２区遺構（1/80）



第10図　Ⅱ地区３区遺構（1/80）

3　遺　物（第11・12図　写真図版7・8）

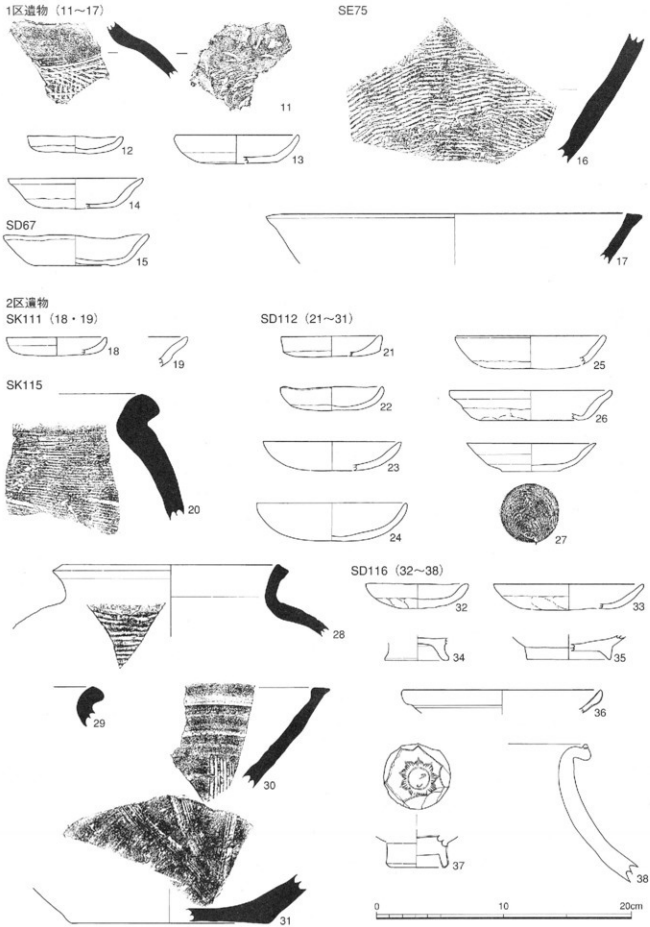
Ⅱ地区1～4区から出土した遺物は、大半が中世に属するものであるが、若干の縄文時代・古代の遺物がある。第11・12図には各区毎に遺物を掲載し、遺構から出土したものに関しては遺構番号を記入した。遺構番号の記入のないものは包含層からの出土である。

1区の遺物　65は縄文土器、11は須恵器壷の肩部の破片、12～15は土師器皿で全て非ロクロ成形、12は口径7.6cm器高1.4cm、13は口径10cm器高2.3cm、14は口径10.8cm器高2.5cm、15はSD67から出土した完形品で口径11.8cm器高2.5cm。時期は12・14・15が14世紀代で、13も14世紀代か。16・17・68は珠洲で16はSE75の底から出土した甕の底部片で時期は14世紀代、17は擂鉢の口縁部で口径30cm、Ⅳ期に属し時期は13世紀末～14世紀代、68は壷の口縁部で、やはりⅣ期に属する。66・67は越前で内面に漆が付着する。同一個体と思われるが、66はSK69からの出土、67はSE70からの出土である。70～76はSK60から出土したもので、70・71は縄文時代の遺物で打製石斧と縄文土器、72～74は土師器皿の口縁部、75は越前の破片でSK60の最下部から出土したもの、76は珠洲の甕の胴部片である。77はSK94から出土したもので瀬戸美濃の口径8cm程度の小型の天目茶碗、時期は15世紀後半か。

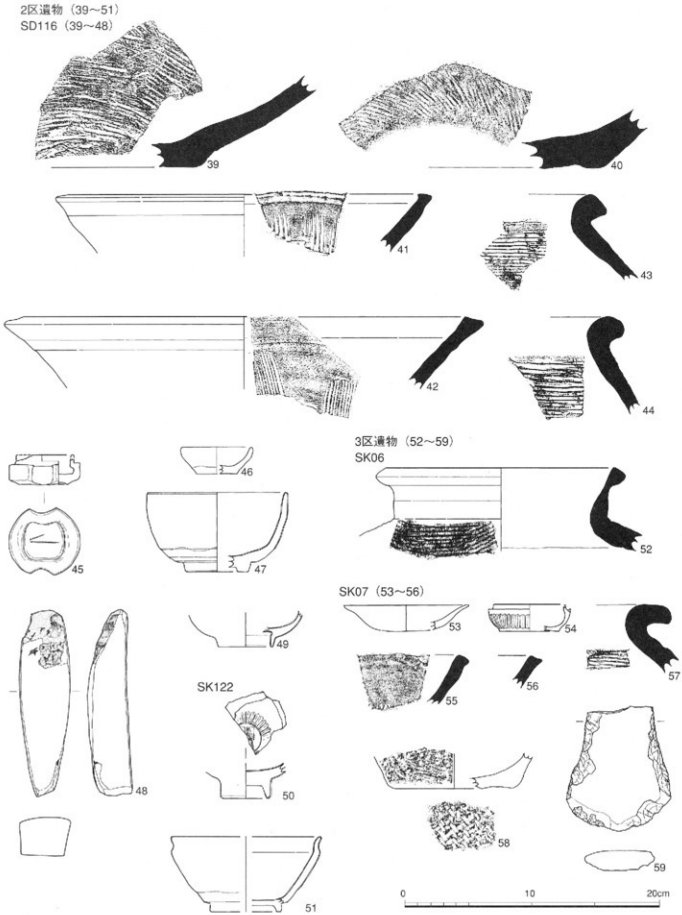
2区の遺物　18・19はSK111から出土した土師器皿、18・19ともに非ロクロ成形で18は口径8cm器高1.5cm、20はSK115から出土した珠洲の甕の口縁部でⅣ期に属する。21～31・79はSD112からの出土で21～27・79は土師器皿、27以外は非ロクロ成形である。21は口径8cm器高1.6cm、22は口径8.2cm器高1.9cm、23は口径11cm器高2.3cm、24は口径12cm器高3cm、25は口径12cm、26は口径13cm器高推定2.5cm内面に油煙が付着、27はロクロ成形で口径10.4cm器高2.3cm。時期は、いずれも14世紀代～15世紀代初頭の間に入ると思われる。28～31は珠洲で28は壷の口縁部で口径19cm、29は甕の口縁部、30・31は擂鉢である。時期は29・31がⅢ期で13世紀後半、28がⅤ期で14世紀末～15世紀前半、30が14世紀末～15世紀初頭と考える。32～48はSD116からの出土で32・33は土師器皿で、いずれも非ロクロ成形、32が口径8.2cm器高2cm内外面ともに焼けて剥離が激しい、33が口径12cm器高2.1cm、時期はどちらも14世紀代～15世紀代とする。34は12世紀後半の土師器の高台部分、35は山茶碗の高台、36は白磁の碗の口縁部でいずれも12世紀後半、37は青磁の碗の高台部で見込みに花弁文の印刻がある。38は越前の甕の口縁部で時期は14世紀後半、41は土師質土器の擂鉢で口径30cm、39・40・42～44は珠洲で39・40が甕の底部、42は擂鉢で口径38.2cm、43・44は甕の口縁部である。時期は、42・43がⅣ期、44がⅤ期とする。45は志野の合子の身で受部径5.7cm底径4cm器高2.4cm、底面に線刻がある。46は瀬戸美濃の小杯で口径5.7cm器高2.2cm、47は瀬戸の灰釉碗で口径11.2cm器高6.3cm、48は瓜石、49は白磁の碗か。50はSK122からの出土で青磁の碗、見込みに連弁の印刻がある。51は瀬戸美濃の天目茶碗で口径推定12cm器高6cmである。81は瓦器の火鉢、82は瀬戸の広口壷の破片と思われ画花文がある。83は北宋銭で篆書体の「皇宋通寶」（初鋳年1038年）、重さは2.46g（欠損部分あり。）を量る。

3区の遺物　52はSK06からの出土で珠洲の壷の口縁部で口径20cm、Ⅳ期に属し13世紀末～14世紀代。53～56はSK07からの出土、53はロクロ成形の土師器皿で口径10cm、時期は15世紀後半～16世紀初頭、54は白磁の合子の身で受部径推定6.6cm底径4.8cm器高推定2.2cmで12世紀後半～13世紀前半のもの、55・56は珠洲の擂鉢である。時期は55がⅢ期で13世紀後半、56がⅣ期で13世紀末～14世紀代。57は珠洲の甕の口縁部、包含層からの出土でⅢ期に属すると思われ13世紀後半。58・78は縄文土器の底部で底面に網代圧痕がある。59は打製石斧である。

4区の遺物　出土した遺物は、土師器皿の破片と珠洲の擂鉢と思われる小片と写真図版8に掲載した石製品のみのわずかであった。84は石製品で高さは3.8cm、最もふくらむ部分の断面は楕円形で長径3.7cm短径3.4cmを図り、底面は楕円形で長径3cm短径2.5cmを図る。頂部には熱を受けた痕跡があり、底面は滑らかである。



第11図　Ⅱ地区1・2区遺物実測図（1/3）



第12図　Ⅱ地区２・３区遺物実測図（1/3）

4 小 結

Ⅱ地区は、幅8～10mで南北に230mという細長い調査区であるため、遺構のまとまりなどを把握するまでには至らなかった。各地点毎の様相をまとめると以下のとおりである。

1区：堀形が径70cm～90cm、深さ50cm～80cmと大型になる柱穴を有する1間×1間の掘立柱建物群がある。この建物群が立地するのは、北にはX135列までで東西への広がりが予想されるもののその範囲は不明である。

2区：北側と南側では、様相が異なる。SK111は、3区で検出したSK06・07と性格を同じくすると考える。3区からの遺構のまとまりは、このSK111を境として途切れる。

ほぼX100から以北は谷状になり氾濫に起源すると考える砂利と粘質土の混合土が堆積する。この地点はかつて「ヌマダ」といわれるほどの湿地であり、地元住民の話どおり沈むのを防ぐために入れた柴や小枝が多数みられた。しかし柱根1・2など中世の遺構の密度は濃い。このことと、砂利層中から近世の陶磁器類が出土することから、氾濫は近世におこったものと考えられ、それを契機に環境が変化したものと想像される。

3区：遺構は、X70以北に集中する。径30cm前後の柱穴かと思われる土坑は多数検出できるものの、掘立柱建物として捉えられるものは少ない。また、建物に伴うと考える方形の土坑（SK06・07）がある。

Ⅴ 考 察

今回発掘調査を実施した地区の時期は、12世紀後半の遺物もみられるものの、13世紀後半～16世紀初頃が主体であると考える。

Ⅰ地区に関しては館跡館と指摘された地区に隣接するが、館の存在を示唆するものの検出はなかった。ただし「壕」とした地形を確認した。館跡の範囲として想定した部分は盛土保存されているので、今後の調査成果を期待する。

Ⅱ地区に関しては、1区で検出した1間×1間の掘立柱建物は、同様のものが福光町の梅原胡摩堂遺跡の調査においても確認されている。これらの掘立柱建物の時期は、15世紀後半～16世紀とされた中世後期のものであり、遺構に伴う遺物の出土がごくわずかなため時期の判断は難しいが、Ⅱ地区1区で検出したSB01～04の掘立柱建物群も同様の時期の可能性がある。なお、2区と1区において検出した掘立柱建物は一連のものと考えるが、3区で検出した掘立柱建物および土坑は時期を異にし、13世紀後半～14世紀代と考える。（境）

参 考 文 献

イ　井口村史編纂委員会　1992　『井口村史』上巻・下巻　井口村

ウ　上野　章・押川恵子　1990　『井口城跡発掘調査概要』　井口村教育委員会

シ　神保孝造　1998　『舘跡A遺跡』　井口村教育委員会

タ　高岡　徹　1980　『日本城郭体系』　第7巻　富山・新潟・石川　新人物往来社

ミ　宮田進一・島田美佐子・田中道子・河西健二　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ―』　財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

　宮田進一　1997　『第4章　第2節　越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』　北陸中世土器研究会

　宮田進一　1997　『第4章　第4節　越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』　北陸中世土器研究会

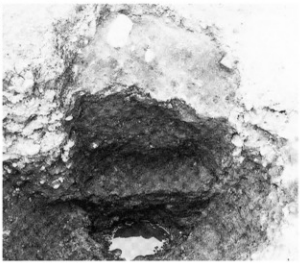
ヤ　山本正敏・島田美佐子・横山和美・中川道子・越前慎子　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』　財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

ヨ　吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

Ⅰ地区全景（南より）

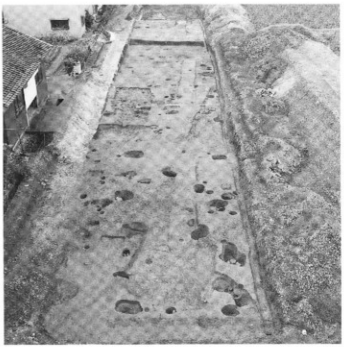
土坑・井戸（南より）

Ⅰ地区基本土層



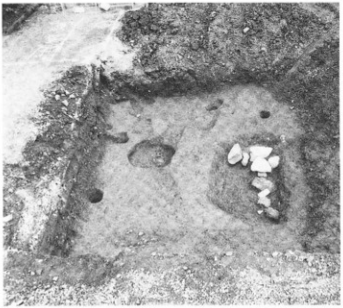
SE01（南より）

SK07土層



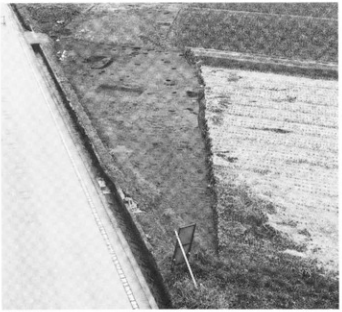
Ⅱ地区1区全景（南より）

Ⅱ地区3区全景（南より）



Ⅱ地区1区（川田宅前、南より）

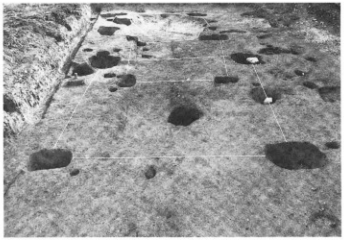
Ⅱ地区2区全景（南より）

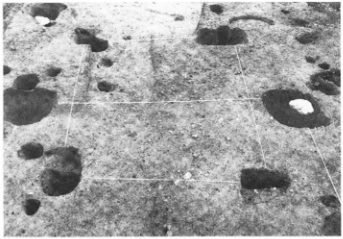


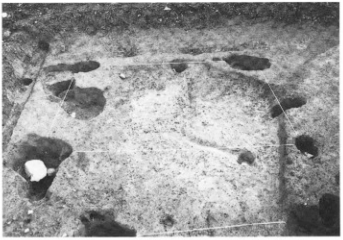
Ⅱ地区4区全景（南より）

遺跡遠景

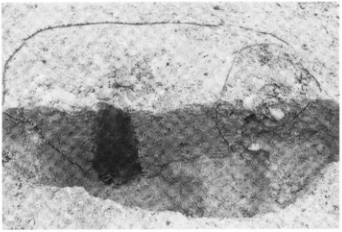
SB01（南より）


SB02（南より）

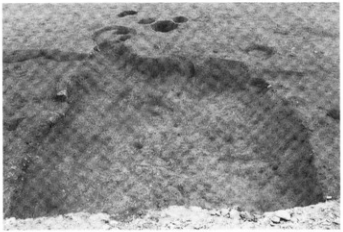

SB03（南より）

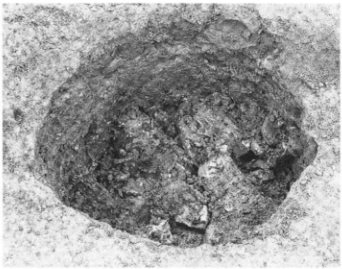

SB04（南より）

SB69断ち割り土層


SK88土層・柱根出土状況

SK60石出土状況（西より）

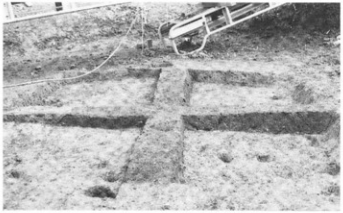

SK60完掘（西より）

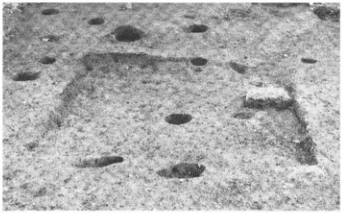

SE75検出状況（東より）

SD67（南より）

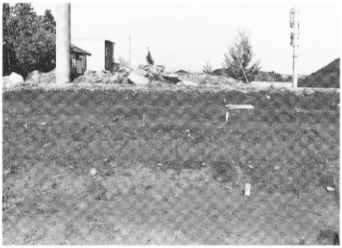
SE75断ち割り土層

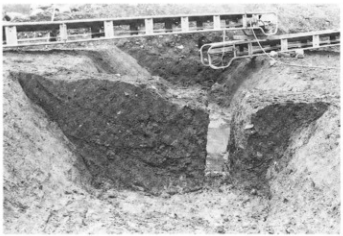
土師器皿出土状況（東より）

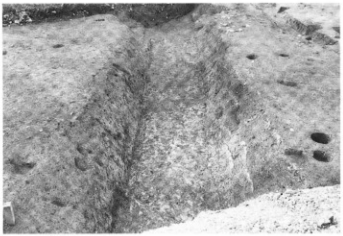

SK111土層（西より）

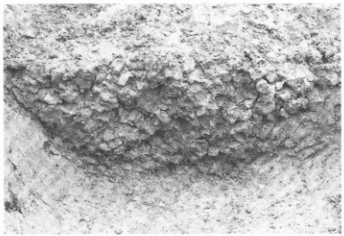

SK111（東より）

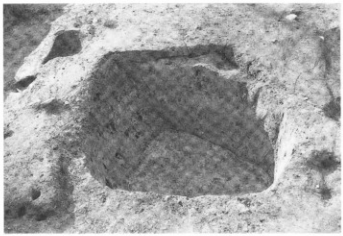
SD117（東より）

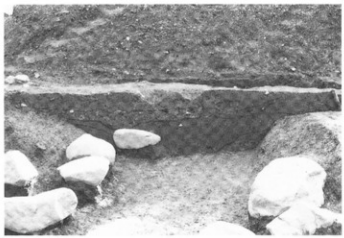

Ⅱ地区2区基本土層


SD112土層

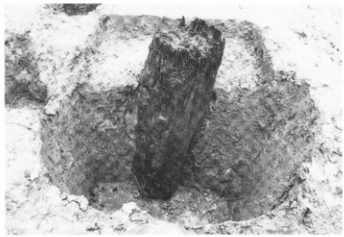

SD112（東より）

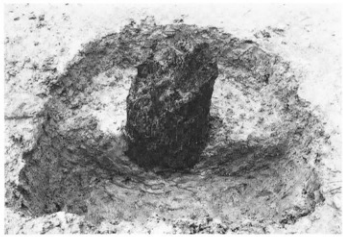

SK115土層


SK115（東より）

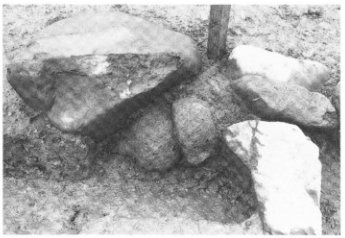

SD116土層

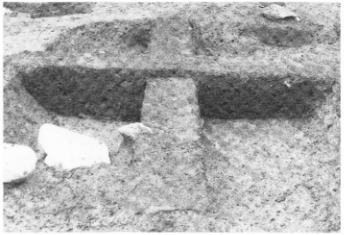
SD116（東より）

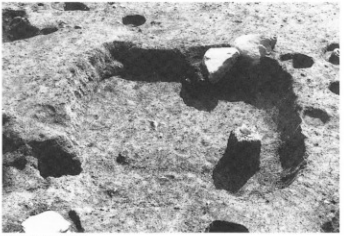

柱根1出土状況

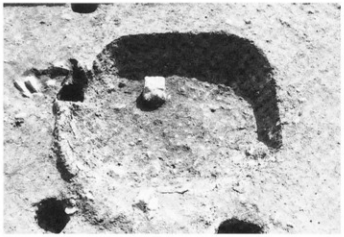

柱根2出土状況

柱根1・2検出状況（北より）

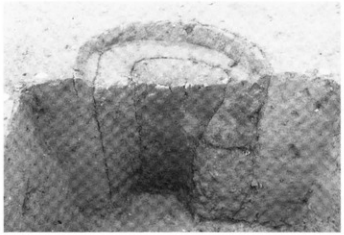

空風輪出土状況（東より）


SK06南北土層（東より）

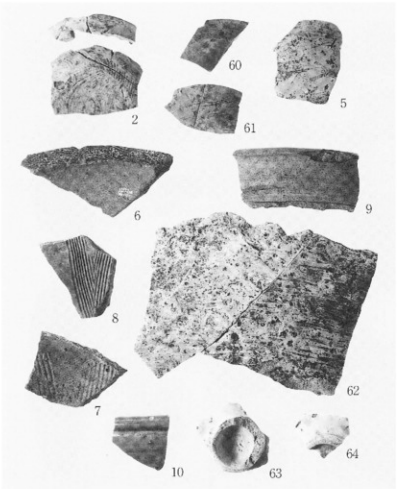

SK06（西より）

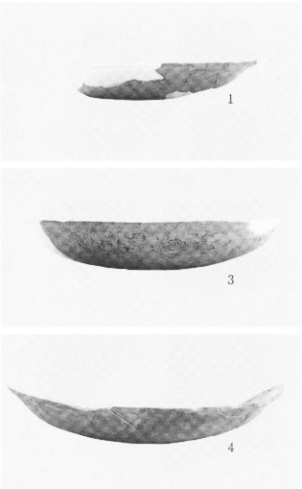

SK07（西より）

SK11（西より）

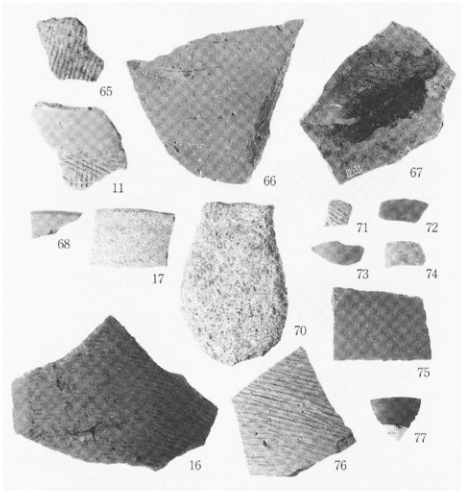

SK104土層

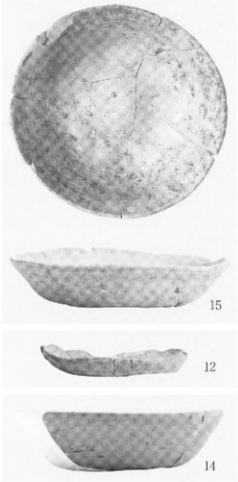
SK105土層



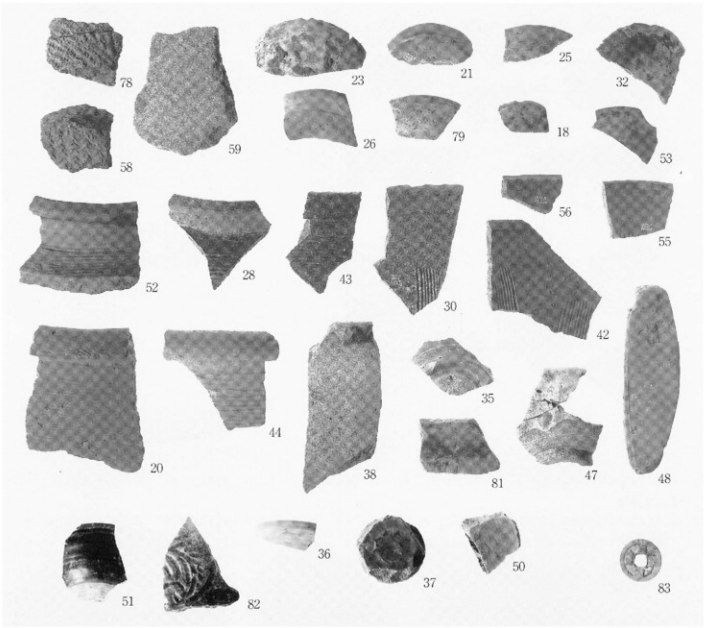


Ⅰ地区出土遺物





Ⅱ地区1区出土遺物（1・3・4・12・14・15は1/2、その他は1/3）



Ⅱ地区２～４区出土遺物（22・24・27・45・46・54・83・84は1/2、その他は1/3）

付　編

蛇喰正覚寺遺跡

村道４号線拡幅部分
村道11号線改 良 区　発掘調査報告

1　調査に至る経緯

村道４号線拡幅部分の発掘調査は、同道路を北側に拡幅する工事に伴い、蛇喰正覚寺遺跡の遺構が存在する部分について実施したものである。

村道11号線改良区の発掘調査は、「県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業」で整備する村道11号線の工事に伴い実施したものである。

なお、両地区の調査はともに井口村教育委員会が主体となり実施したものであり、実際の発掘調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから同センター調査課　主任　安念幹倫・同　文化財保護主事　境　洋子の派遣を受けて実施した。

2　調査の概要

(1) 村道４号線拡幅部分

村道４号線は、蛇喰正覚寺遺跡を東西に横切っている。このうち、試掘調査結果から遺構が存在しないと判断した部分を除く部分のみの本調査を実施した。対象地区のちょうど中央部分が谷になり、調査地区が分断されるため、東側と西側にわけてそれぞれ東側調査区・西側調査区とした。各区の調査面積と調査期間は、以下のとおりである。

東側調査区　280㎡　平成10年６月23日（延１日間）

西側調査区　250㎡　平成10年10月５日～22日（延５日間）

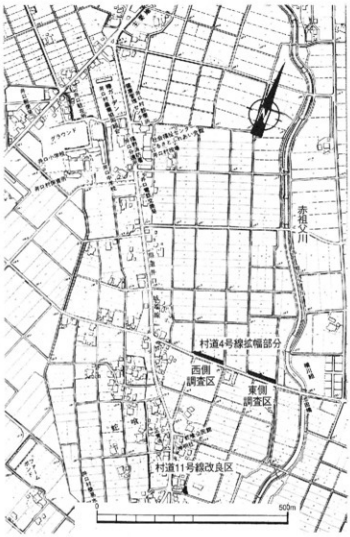
調査の方法は、重機で旧水田の耕作土を除去した後に、包含層が残存していなっかったため、直ちに遺構検出にうつり順次調査を進めた。また、調査区が南北幅４～６mと狭いことから、あえてグリッドは設定しなかった。

なお、西側調査区は蛇喰館跡とされており、今回の調査結果でも遺構の検出数、遺物の出土量ともに比較的多いといえる。このことからも調査区北側には、中世の館に関連する遺構が存在する可能性がある。

(2) 村道11号線改良区

この調査区は、Ⅱ地区２区に接する調査区で、同調査区の調査と並行して本調査を実施した。調査面積は98㎡である。

調査の方法は、重機で旧水田の耕作土を除去した後に掘削を開始した。包含層の堆積はほとんどなく、氾濫を起源とすると考える砂利混じりの層を除去すると、この砂利混じりの土を上層の覆土とする遺構を検出することができる。この地点は、地元住民の話では「ヌマダ（沼田）」と呼ばれていたそうである。調査の結果、中世には居住域であったことがわかったが、その後の環境の変化により「ヌマダ」と呼ばれるほどの湿地になったものと思われる。（境）



第13図　発掘調査地区の位置（1/10,000）

3　村道４号線拡幅部分の調査

村道４号線は、蛇喰地区のほぼ中央部にあって、一般県道井波・井口・城端線との交差点を起点とし、東へ進み、赤祖父川を渡った辺りから緩やかに北上し、池田地区に至る、全長１km程の道路である。

当村では、今回のほ場整備事業で区画される水田に隣接する同４号線部分の拡幅事業を、ほ場整備事業と並行して実施することとした。なお、拡幅部分は歩道等となる道路北側である。

(1) 遺　構（第16図　写真図版９）

調査区は４号線側壁から北側へ３m前後の幅で、東側調査区は全長約45m・西側調査区は全長約70mである。

検出した遺構は、西側調査区では土坑を約30基、井戸を２基、溝１基、東側調査区では井戸を１基である。なお、調査区の地山は黄褐色系の粘質土である。

SE01　東側調査区中央で確認した素掘りの井戸。掘形は径40cmの円形で深さ50cmを測る。埋土は褐灰色粘質土であるが、底部に近づくにつれてしまりのない黒褐色粘質土となる。曲物と板状木片が出土した。

SE05・17　西側調査区中央で確認した素掘りの井戸である。05の掘形は径110cmの円形、07は遺構の半分が北壁にかかるため全容はつかめないが、掘形は径70cmの円形である。いずれも深さは不明。埋土は黒褐色粘質土であるが、井戸内の半ばあたりからは礫を含むしまりのない黒褐色粘質土となる。現在でも水がしみ出ている。

SKは径が20～30cmのもの・70cm前後のものがあり、深さは30cm前後を測る。SD02は上端60cm・下端40cm・深さ50cm前後を測る、南北溝である。　（安念）

(2) 遺　物（第14図　写真図版11）

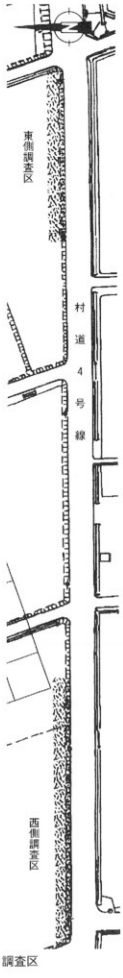
遺物はすべてが遺構からの出土である。東側調査区の遺構はSE01のみであるため、遺物はこのSE01から出土した曲物・板材・自然木のみである。西側調査区から出土した遺物には中世の土師器皿・珠洲・瀬戸・木製品・鉄製品がある。

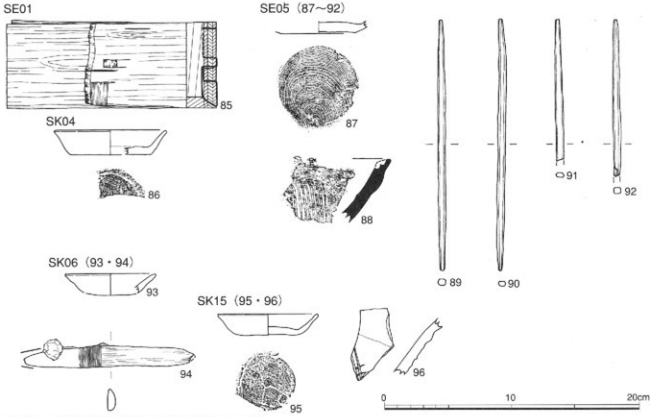
A　東側調査区の遺物

85は、SE01から出土した曲物である。径16.5cm高さ７cmで底板は凹レンズ状になっており、厚いところで１cm、薄いところで0.7cmである。目釘は用いない。

B　西側調査区の遺物

86はSK04から出土した土師器皿である。ロクロ成形で口径９cm器高1.9cmである。時期は15世紀後半である。87～92・102はSE05からの出土で87がロクロ成形の土師器皿の底部で底径６cm、102がロクロ成形の径７cm器高1.5cmの小型の土師器皿、88は珠洲の片口鉢で卸し目の幅が3.5cmと広い。89～92は箸状木製品で89が長さ20.1cm90が長さ20.3cmである。88の珠洲の時期はⅤ・Ⅵ期で15世紀代とする。93・94・100・101はSK06からの出土で93はロクロ成形の土師器皿で口径７cm、100・101も同じく小型の土師器皿である。94は小刀で糸を巻いた痕跡がある（図の糸より左側が刃部）。95・96・103はSK15からの出土で、95は小型の土師器皿で口径８cm器高1.7cm底径4.5cmである。96は瀬戸の卸目付大皿である。104はSD02から出土したロクロ成形の小型の土師器皿である。これらの土師器皿の時期は15世紀代のものと考える。　（境）





第14図　村道４号線拡幅部分遺物実測図（1/3）

4　村道11号線改良区の調査

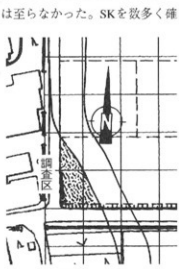
(1) 遺　構（第17図　写真図版10）

狭い調査区であるが、遺構は密である。確認した遺構は柱穴・土坑(SK)・井戸(SE)等である。また、平成９年度に実施した試掘調査の試掘坑T237を入れた箇所でもある。層位は農道調査区と同様であるが、地山面はオリーブ灰色粘質土に小礫が入った層である。また、遺構検出面はⅡ地区２区よりも若干高い。

柱が出土した土坑は、SK114・118・127・129である。127(X105Y４)の柱は径15cm・長さ25cm、129(X103Y３)の柱は径20cm・長さ30cmで、掘形はそれぞれ長軸80cm・短軸50cm前後の楕円形で深さ約50cmを測る。118から(X102Y３～４)は径15cm・長さ25cm、径15cm・長さ25cmの２本の柱が出土した。掘形は長軸２m・短軸90cmの楕円形で深さ約１mを測る。114(X104Y４)は、平成９年度の試掘調査の際、径20cm・全長75cmの柱が出土した径70cmの円形土坑である。。柱を有する土坑を絡めて建物の検討をしたが、建物の確認までには至らなかった。SKを数多く確認した。掘形には円形のもの（114・120・128・130）、楕円形のもの（118・119・125・126・127）がある。埋土は、褐灰色粘質土に小礫、灰色粘土またはオリーブ灰色粘質土が混入したものが多い。

SK131(X106～107Y４)は径１m前後の２基の土坑が切り合ったものと考えられる。深さが約90cmと深く井戸のような掘形であるが、湧水層に達していない。

SE133・136　素掘りの井戸である。133の掘形は長軸２m・短軸１m前後の楕円形だが、径１mの円形に浅い段掘りが南西に付いたものである。深さ約140cmを測る。また、珠洲の壺(97)・折敷の底板(98・108)・箸(99)等が出土した。136の掘形は径約90cmの円形を呈し深さ約150cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であるが、底部に近づくにつれて人頭大程の礫を含むしまりのない黒褐色粘質土となる。(安念)



村道11号線改良区

(2) 遺　物（第15図　写真図版11・12）

97～99・107・108はSE133からの出土である。97は珠洲の壺である。口径13.8cmを図り、胴部は叩きの痕をなでけしているが一部に痕跡を認める。肩部に「八」の字状の刻文があり、右→左の順に刻んでいる。また、漆による継目が胴部を巡っており、継目で再度破損したことがわかる。時期はⅤ期に属して15世紀前半頃とする。98・108は折敷の底板で、98はわずかに長方形を呈し、長辺で19cm短辺で16cmを図り、厚さは0.3cmである。108は長さ18.5cm、厚さ0.3cmである。99は箸状木製品で長さ21.5cmである。107は桶の底板の一部である。105はSK125から出土した越前の甕の胴部破片、106は包含層中から出土した青磁の碗の口縁部破片である。なお、写真図版８に掲載した83の「皇宋通寶」は、SK125から出土したものである。

また、109は平成９年度に実施した試掘調査により出土した柱根である。第237トレンチを掘削して出土したもので、今回の調査結果と重ね合わせて検討したところ、SK114に残っていた柱根と推定できる。今回の調査ではいくつかの柱根が出土したが、この柱根が最も遺存状態がよいと思われる。多角形に面取りをしており、径は20cmを図り端にはえつり穴がある。この外の柱根としてはⅡ地区２区から出土した柱根１・２の柱根、SK118・127・129から出土した柱根がある。（写真図版５・10参照）

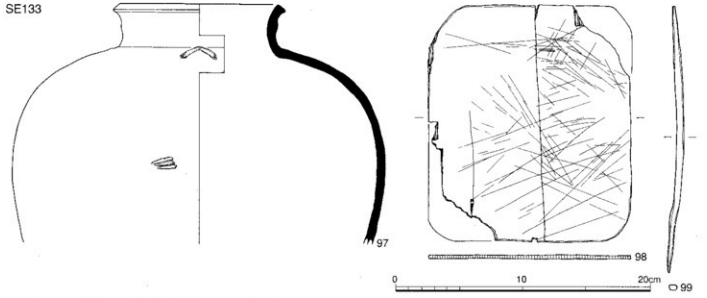
5　むすび

(1) 村道４号線拡幅部分

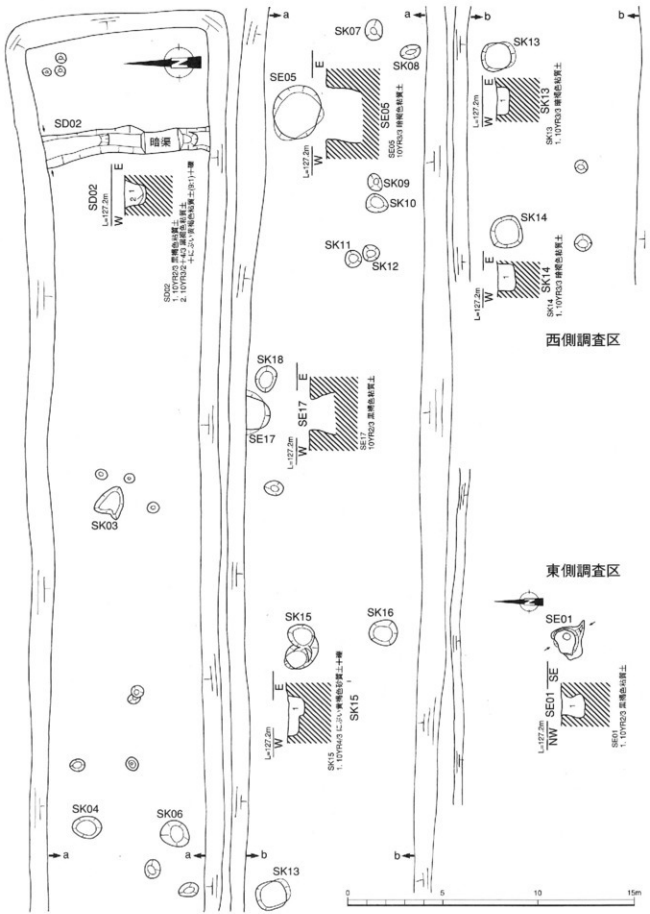
この調査地区のうちの西側調査区は、鉈喰館と指摘された地区に南接する。調査面積に比して遺構の検出量は多いと言える。館の存在を示唆するものの検出はなかったが、遺構の広がりが想定できる。今後の調査成果を期待する。

(2) 村道11号線改良区

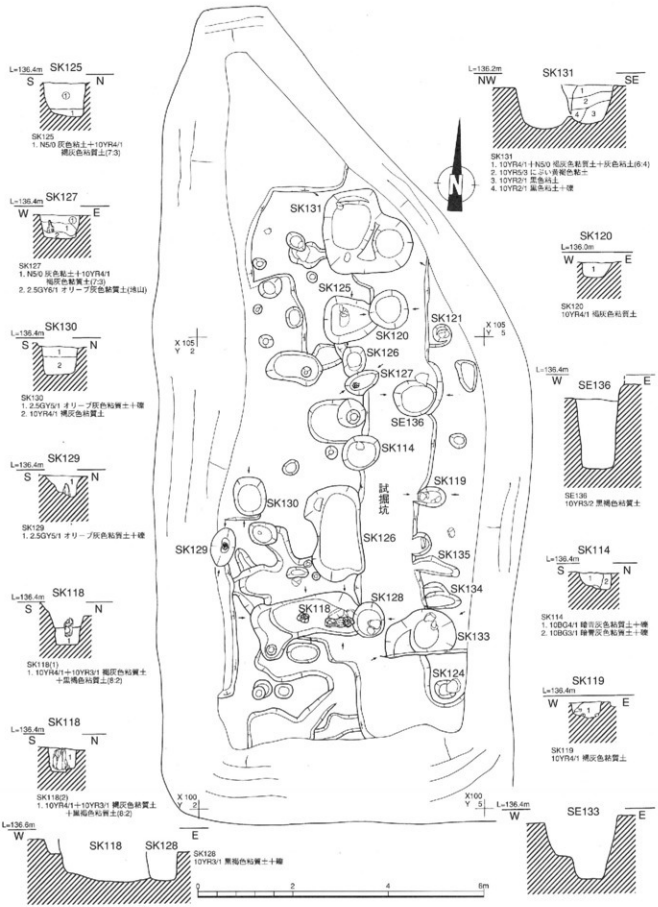
この調査地区からは、柱穴と井戸の検出が目立った。「ヌマダ」と呼ばれるほどの湿地であったことから柱根がよく残っている。調査範囲が限られるため全容の把握はできなかったが、この柱根の出土から掘立柱建物群の存在が想像でき、遺構はさらに西側に広がると考える。時期に関しては遺物の出土がわずかであることから確定することはできないが、隣接地区の調査からして、幅は広くなるが13世紀後半～15世紀代か。　（境）



第15図　村道11号線改良区遺物実測図（1/3）



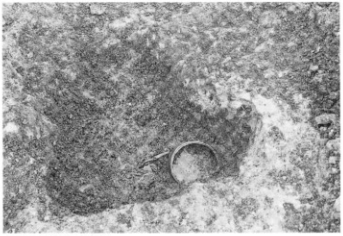
第16図　村道４号線拡幅部分遺構（1/100）

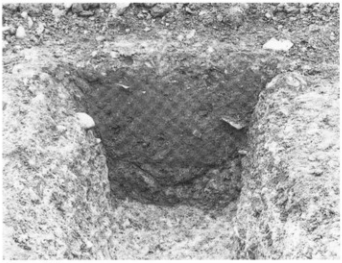


第17図　村道11号線改良区（1/80）

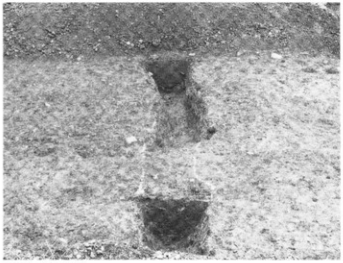
西側調査区全景（西より）

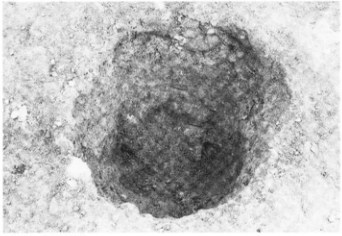
東側調査区全景（西より）


SE01曲物出土状況


SD02土層

SK06土層

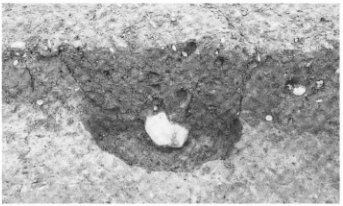

SD02（南より）

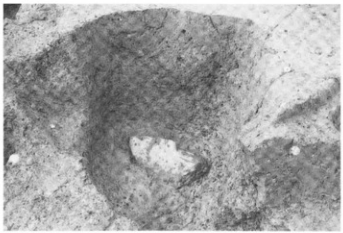

SK06（東より）

村道11号線改良区全景（北より）

全景（上空より）

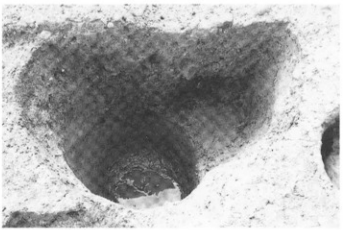
SK128土層

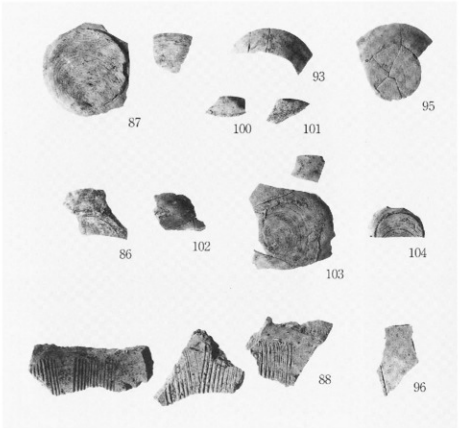

SK114土層

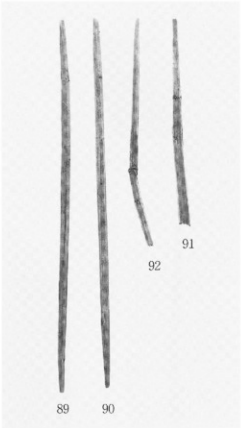

SK125（東より）

SK118柱根出土状況（西より）

SK131（北より）


SE133（北より）





村道4号線拡幅部分出土遺物

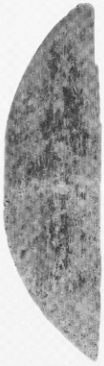
村道11号線改良区出土遺物（85・89～92・94・97は1/2、その他は1/3）

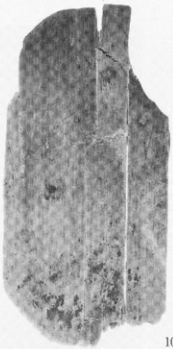
105

106

98

99


107


108

109

村道11号線改良区出土遺物（105・106は1/3、109は約1/5、その他は1/2）

報告書抄録

書名	県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　蛇喰正覚寺遺跡
編著者名	安念幹倫・境　洋子
編集機関	富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0115　富山県富山市茶屋町206番地3号
発行年月日	西暦1999年3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
蛇喰正覚寺遺跡	富山県東砺波郡井口村蛇喰	16407	020	36°32′00″	136°56′12″	19980624〜19981111	3,200m²	基盤整備に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蛇喰正覚寺遺跡	集落	縄文時代 古代 中世 近世	掘立柱建物7棟 溝・井戸6基・土坑	縄文土器・打製石斧 須恵器・土師器 土師器皿・珠洲・越前・八尾・信楽・瀬戸・山茶碗・青磁・白磁・古銭・木製品（曲物・箸・折敷・漆器）・鉄製品・砥石・五輪塔（部分） 越中瀬戸・志野・肥前陶磁器・唐津・染付・古銭	

県営担い手育成基盤整備（区画整理型）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

蛇喰正覚寺遺跡

発行日　平成11年3月31日
編　集　富山県埋蔵文化財センター
発　行　井口村教育委員会
〒939-1874　富山県東砺波郡井口村蛇喰26
☎(0763)64-2211(代)
FAX(0763)64-2210
印　刷　有限会社オダケ印刷社